BOOK REVIEW 書評

私は、看取り士。

幸せな最期を支える

柴田久美子著

日本マクドナルドのモーレツ社員だった十六年間の終わりに離婚、大病に遭遇し、転職した老人施設で高齢者の不幸な最期を目の当たりにした著者が、隠岐の離島に移住し、死に逝く人たちの看取りを始めたのが二〇〇二年。著者が作った「なごみの里」が地域の人たちから「看取りの家」と呼ばれ、取材したジャーナリストに名付けられたのが「看取り士」。多死社会を迎え市民権を得つつある。

今、一週間ほどの研修を受け、看取り士の資格を取った人は約三百六十人、それを支えるボランティアのエンゼルチームは全国に約三百九十支部。看取りは平均十時間、看取り士二人とエンゼル十人で担当している。看取り士の60％が看護師というところに今の医療の課題が見える。死を敗北とする医療から、幸せな死を支える医療への転換である。

著者が手さぐりで開発した看取りの基本は、呼吸を合わせ、抱いて寄り添うこと。一番楽な姿勢は、ベッドの上で片足をまげて座り、腰で高齢者の頭を抱える。三時間で交代するのは、やさしさを途切れさせないためだという。

著者の話を聞いた鎌田實さんは、「（認知症ケアの）ユマニチュードはマニュアル化されていて、今、世界中に広がっています。でも、僕は、柴田さんのほうがなんというか、ドロドロして人間らしいというか、好きですね。確立していないけれども、大事なところはつかんでいる」と語っている。ユマニチュードでは背中にそっと触れるのだが、看取りはがばっと抱える。

医療現場でも、死亡宣告の前に、家族に患者の手を握るよう勧める医師がいるという。死を前向きにとらえる著者は、死は命のバトンタッチの時で、温かさを感じながら、命のエネルギーを受け取ると語る。

約半数の人が在宅死を願いながら、80％以上が病院などの施設で最期を迎えているが、ベッド数の抑制で数年後には病院で死ねない時代が来る。著者たちの活動が、そんな時代の福音となれるよう期待したくなる。（彼成出版社、1400円＋税）

四季のこころ

清水寺貫主のありがたい法話

森清範著

毎年八月五日、清水寺のうら盆法話の最終日、同寺貫主の法話を聞くのを楽しみにしている。法話がうまい寺は同寺や薬師寺など、いわゆる信者寺に多い。檀家がないので法話や法要の魅力で人々を引き付けないといけないからだ。もっとも清水寺は観音信仰で栄えた歴史があり、今や京都観光のメッカ。しかし、一時はかなり衰亡していた。

その理由は明治の廃仏毀釈。見かねた奈良の興福寺から大正三年、大西良慶管長が乗り込み、清水寺住職を兼ねると、寺の復興と観音信仰の布教のため大衆向けの法話を始めた。以後、戦時中も中断されず、昭和五十八年に百七歳で他界する前年まで六十七年間、語り続けたのである。その系譜にある森貫主も、ユーモアを交えながら深い教えを分かりやすく説くので、聴衆を飽きさせない。そんな法話の秀作が、四季に即してまとめられている。

西国三十三所巡礼草創千三百年の今春三月、第十六番札所である清水寺随求（ずいぐ）堂の大随求菩薩が二百二十二年ぶりに御開帳された。三十三所巡りを始めたのは奈良・長谷寺の開基・徳道上人で、死の直前、夢に閻魔大王が出てきて、観音のご縁に会わないため地獄に落ちる人が多いから、そちらで人々を導くようにと言って宝印を授けた。そこで徳道上人は観音霊場を定め、巡拝するようにしたという。観音菩薩は人々を浄土に救う仏で、元来中性だが、日本では慈母のイメージが重なり、観音信仰が広まった。

ことわざの「猫も杓子も」は、もとは「禰子も釈氏も」。禰子は神道の禰宜で、釈氏は仏教僧のこと。つまり「神主も僧侶も」という意味で、そこから日本古来の神仏習合の信仰についてひとくさり。ちなみに清水寺では初夏の六月、石清水八幡宮と国家安泰世界平和祈願献花祭を営んでいる。寺の貫主が導師を、神社の宮司が斎主を務め、神事と法要を同時に行うのである。関西には百五十の古社名刹による神仏霊場会があるなど、信仰でも先端を切り開いている。（KADOKAWA、1600円＋税）

韓国女子涙と絆の四国八十八ヶ所参り

施しを受けるうちに、施す人に

崔象喜著、牧山公美訳

著者が四国遍路を始めたのは三十代半ばの二〇一〇年。父の事故死と店の倒産、大金を貸した知人の失踪に失恋という悲運から脱するため。当時、韓国語のガイドブックはなく、探したハングル版旅行案内図を手掛かりに、徳島に渡った。

弘法大師が千二百年前に開いたという八十八ヶ所巡りは、最初は僧の修行の道だったが、次第に一般人も供養のため歩くようになり、江戸時代にブームとなる。白装束は死に装束で、大師と共に歩く意味から菅傘には「同行二人」と書かれている。行程約一五〇〇キロは歩き遍路で約八十日。近年、外国人も増えている。

三月初め、発心の道場・徳島の初日は雨。一番札所の霊山寺で六十五歳の男性に、一緒に歩かないかと声をかけられ、著者を韓国人だと知った尼僧から白衣をお接待される。それぞれの思いを抱えながらの独り旅だが、不思議なご縁に出会うのがお遍路。飲食や宿のお接待をする文化が、遍路道には息づいている。

女性の独り旅が不安でないはずはない。セクハラを疑う行為を受けたこともあり、無料の善根宿に泊まったのはいいが、不安で眠れなかった夜も。面白いのは、不信感を抱いた男性とも再会し、わだかまりが解けたこと。

遍路ころがしの坂をあえぎあえぎ登りながら、ふと誰かが声をかけてくれているような気がして振り返ると、大師の像があったり。韓国人女性が住職の十三番札所大日寺では、外出していた住職がたまたま立ち寄り、会うことができた。

涅槃の道場・香川県では、村上春樹の『辺境・近境』で楽しみにしていた讃岐うどんに舌鼓。次回はうどん巡礼をと考えたりする。

いろいろなお接待を受けるうちに、著者も誰かにお返ししたいという気持ちになる。そんな自分をもっと成長させるためにか、以後、四国遍路を七回、小豆島遍路も一回結願し、外国人女性として初の公認先達となって、香川にお遍路小屋を開設している。

韓国女性らしいアクティブさが魅力的だ。（アートヴィレッジ、1389円＋税）

都会のオアシス

亀岡神社（長崎県平戸市）

平戸城内にある亀岡神社（下條紀元宮司）は、歴代松浦藩主を祀っている。

宝永５年（1708）に第30代松浦棟氏が建立した松浦家の祖廟霊椿山神社が、戸城の一郭、現在の霊椿山平戸護国神社付近にあった。社殿の破損を憂えた平戸藩最後の藩主、第37代松浦詮氏は、新築遷座の計画を立てた。郷社に七郎神社、乙宮神社、八幡神社も老朽化が進んでいたので、氏子の願いに応じて４社を合祀し、松浦家の居城二の丸の高台の地に神社を新築遷座することにした。

明治11年、霊椿山神社、七郎神社、乙宮神社、八幡神社の遷宮を願い、４社の合祀が承認され、県社格に列せられた。全ての許可を得て着工し、明治13年（1880）に竣工、亀岡の地名に因み亀岡神社と命名された。松浦詮氏を迎え、厳かに遷宮を執り行い、氏子住民による盛大な曳き山、各種の踊りなどが奉納された。

亀岡神社をはじめ旧平戸藩領内の神社に伝わる平戸神楽は24番からなり、笛、太鼓を主旋律とした雅楽によって舞われ、歌詞は敬神思想の鼓吹と尚武清浄の気に満ちた荘重なものである。歴代藩主の保護奨励をうけ、藩内神社の祭礼には必ず奉納されている。特に亀岡神社秋季大祭の10月26日には平戸神楽24番が奉納される。昭和62年国指定無形民俗文化財となり、平戸神楽振興会により神楽の伝承と振興がはかられている。平戸桟橋から徒歩15分。

敗戦後の日本を慈悲と勇気で支えた人

スリランカのジャヤワルダナ大統領

野口芳宣著

戦後、日本の独立が回復された二九五一年のサンフランシスコ講和会議に、セイロン（現スリランカ）の代表として参加し、後に第二代大統領になるジャヤワルダナ大蔵大臣は、アメリカ、イギリス、中華民国とソ連の四大国だけが講和条約の作成に当たるべきだというソ連の主張に反対した上で、他の代表たちが日本の分断統治や賠償金を求めるなか、「戦前」日本の掲げた理想に、独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい」と述べた。

とりわけ共感を呼んだのは、「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によって止む」という、釈迦の言葉を集めた「法句経」の一節を引用して、日本に対する賠償請求を放棄する旨の演説を行った。これが、厳しい制裁措置を求めていた一部の戦勝国を動かし、日本が国際社会に復帰できる道を開いたのである。

戦時中、日本の空軍がセイロン北部のトリンコマリー港を爆撃して、イギリスの戦艦を撃沈させ、タンクを破壊し、死傷者が出ているので、セイロンにも賠償請求権はあった。

もっとも、日露戦争当時、イギリスの植民地下にあったセイロンは、日本がロシアに勝ったことに歓喜し、皇太子時代の昭和天皇が一九二二年、巡洋艦で欧州各国を訪問した途中、コロンボ港に立ち寄った際、当時十四歳のジャヤワルダナ氏は見学に行ったほど親日的だったという。

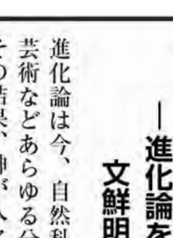
イギリス式の教育を受け、クリスチャンになったジャヤワルダナ氏は、青年時代に仏教の慈悲の精神に引かれ、仏教徒に改宗した。それは、イギリスからの精神的な独立宣言だったのかもしれない。

著者は父親が始めたスリランカの子供たちの里親を引き継ぎ、同国の貧しい子供たちを支援するコスモス奨学金の副代表を務めている。本書はそうした著者の活動に興味を持った小学六年生の孫に、スリランカと日本との歴史を語るもので、現地に取材し、一次資料に基づきながら、分かりやすく書かれている。（銀の鈴社、1800円＋税）

私、ひとりで死ねますか

生前契約で「自分らしい最期」

松島如戒著



都市学者・磯村英一の依頼で一九九〇年にわが国初の合葬墓「もやいの碑」を巣鴨に建立、もやいの会を設立した著者は、ある女性会員から「ひとりで死ねますか」と聞かれ、二年後に生前契約が本書。

経験すればわかるが、死後処理はかなり煩雑だ。国は自宅死を勧めているが、いわゆる孤独死の場合、異常死として警察が介入する。それを避けるには、警備会社などの見守りサービスを受け、死亡診断書を書いてもらう在宅医を決めておく。役所に死亡届を出し、火葬許可書の交付を受け、葬式。その後も、各種保険などの解約、健保からの見舞金受領、資格などの返上、関係団体への通知、預金の解約などいろいろ。法的には相続人でないとできないことが多いのを、「りす」が生前契約に基づき行う。

近年増えているのは保証人の代行。就職や家の賃貸、老人施設への入居などにも保証人が求められるが、独居者には不可能。さらに終末期医療についての希望など。今の法律では人権は死亡とともになくなるが、「りす」の目的は死者の人権を守ること。

業務を監視する決済機構があるのも信頼できる。申込金五万円、法人維持費十五万円、月会費千円、個別の利用費はその都度払いも良心的だ。（日本法令、1500円＋税）

宗教新聞講演会

征韓論から西南戦争へ、西郷の理想と現実

倒幕を果たし新政府を樹立した西郷隆盛は、その運営を大久保利通らに任せ、自身は鹿児島に帰ります。明治政府は廃藩置県など中央集権化を断行しますが、日本の未来像を示すことはできませんでした。明治４年、政府首脳の岩倉使節団は１年半の欧米視察に出かけ、留守政府を預かった西郷は、陸軍省・海軍省の設置や学制の制定、太陽暦の採用、徴兵令の布告、地租改正条例の布告など実施します。しかし、朝鮮外交をめぐって大久保らと対立、明治６年に下野して鹿児島に帰ると、鹿児島出身の官吏や兵士の多くが行動を共にし、やがて西南戦争につながります。その背景にあった国家像の対立をひも解きながら、今日のグローバル時代における日本のあり方を考えたいと思います。

［講　師］金子宗徳　里見日本文化学研究所所長

主　催：宗教新聞社
後　援：NPO法人にっぽん文明研究所
日　時：11月15日（木）
　午後1：00開場　午後1：30～午後3：45
会　場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）
　＊会議室名は当日案内板でご確認ください。電話 03-3261-9921
　JR中央線（各駅停車）、地下鉄有楽町線・南北線、都営地下鉄新宿線
　各市ヶ谷駅下車徒歩２分
会　費：1000円（本紙購読者無料、資料・コーヒー含む）
申　込：氏名、住所、電話番号を記入の上、11月12日（月）までFAXかEメールで。
　●宗教新聞社　〒160-0022　東京都新宿区新宿5-13-2　４F
　電話03（3353）2940　FAX03（5363）5182
　Eメールreligion@sage.ocn.ne.jp
　●にっぽん文明研究所　電話045（481）9361　FAX045（491）7461